

提出日 平成22年8月27日

「完了報告書」

要介護者及び突然言葉を発する事が困難となった人と医師、看護師、家族への意思伝達の方法に「色の持つ効果と作用」を利用した研究。

研究者 カラーセラピスト 田中政子  
住 所 大阪府吹田市山田南29-3-802  
電話番号 06-6878-0675  
協力者 看護師及び介護士

### 「はじめに」

私は、長年高齢者施設や病院で高齢者の方に色を塗ってもらいながら会話をするという事をさせて頂いております。

主に脳梗塞、脳出血等で言葉を発する事が困難になられた方、手足が動き難い方や軽い認知症状の方が対象です。

毎回伺った時にお見かけする男の方で、いつも車椅子に座った状態で長時間窓から空を眺めたままボーとされている方に、「・・・さん色をぬってみて！」となんども声をかけても知らん顔で、何の反応もされませんでした。それならと思い、私が赤とオレンジの色の紙を見せて大きな声で「これ、何色かわかりますか」と2, 3回声をかけたら、ソォーと指で色の紙をさし「アー」とか「ウー」とか言われた。私は何かを思い出されたなーと感じました。

次の機会に「・・・さんこの色好きやったなあー」と声をかけたらニンマリされたお顔を見て、色は脳への反応が速い、色は脳と体に深く関わっている、常に色を見る事で記憶のよみがえり、脳の回路が活性化されることでリハビリの一端を担えるのでは考えています。

### 「趣旨」

色が脳と深く関わりがある事に興味を持ち調べて行く内に、色を見ることで脳の視床下部から松果体に伝達し、ホルモン分泌の指令を出すきっかけとなる。

著書「脳は美をいかに感じるか」セミール・ゼキ=著、河内十郎=監訳では、

物を見た時の脳の活動の指標である脳血流の変化が書かれてある。

それによると人間の脳は「色」を見る事で脳の血流の活性が「色」のないものを見ている時よりも広範囲に活性している。また「形」については抽象的なものより具象的なものを見た時の脳の活動は広範囲に活性していると述べられている。

著書「脳のカ△なるほど事典」医学博士、中川英臣=著では、脳は左半球(左脳)右半球(右脳)に分れ、言語にかかる機能は左脳が担っており、右視野で見た絵や色の名前は言えるが左視野で見た絵や色の名前は言えないとある。

病気や事故で失われた神経細胞のかわりにリハビリをすることによって、他の神経細胞が補う(脳の可塑性)。

では常に「色」や「形」を見る事で右脳の活性を盛んすると左脳への影響を及ぼすと考えている。

## 「目的」

突然何かのアクシデントで言葉が発する事が困難となった患者さんは手話や点字という手段もなく、身振り手振りや筆談という方法で意思表示するが、時間とエネルギーの消耗で長くは続かない。その内黙ってしまい、心のひきこもり状態から寝たきりの状態になりかねない。

患者さんが自分の体の具合、それがたとえ些細なことであっても医師や看護師に告げることで安心し気持ちが楽になることが自己治癒力、自己再生力を引き出す事につながる。

色使いは主に共感色でまとめた。

著書「ガイアの色」東洋大名誉教授 野村順一=著 “健康と色”では、色彩の振動はその色彩が該当する体の部位の振動と合致してその部位を生き返らせると述べられている。

## 「方法」

看護師、介護士の方に病院等で患者さんがよく訴えられる症状を集めてもらう。

主に患者さんしか判らない症状

### 申請書に記載の計画の訂正

- 1、当初申請書の計画には医師に患者の症状等をアドバイスを受ける予定でしたが、知り合いの医師から患者さんは医師には遠慮して本当のことは言わない事が多いので、常に優しく接してくれる看護師さんや介護士さんにアドバイスを受けたほうが適切ですよと言われたので看護師、介護士の2名にしました。
- 2、試作品の仕上がりを本の形もしくは三ッ折りの状態を予定しておりましたが、各部位ごとに同じ症状を書くことになり枚数が多くなり、患者さんが使いにくいと考え、一番シンプルな形にしました。

### 「最後に！」

色が私達の心と体に深く関わっていることは書物やデータなどで知る事は出来るが、日常の生活の中では実感する事が難しい。

気持がふさがちな患者さんに少しでも色に触れる機会になれば、という思いで創りました。